# 二胡が響く、雲の上で

甘夏主任

トキメキファンタジー
ラ☆ファル☆

# 二胡が響く、雲の上で

今から二年前。アガシュラが、このジエンディア大陸で暗躍していた頃。
龍京という街でのことだった。
この街は、山岳に囲まれた都市で、交易の便はよろしくない。それでも人口が多く、市が栄えているのは、エリアス王国によって大陸が統一される以前、ひとつの国家として統治されていたことがあるためだろう。絢爛な建物が、山沿いにいくつも建てられていて、それがこの都市の文化と繁栄を象徴している。
険しい山岳地帯を越えて、商人たち、旅人たちが集まってくる。それら目当てに、大通りにはさまざまな商店が並んでいる。人の往来が活発で、日中はむせ返すぐらいの熱気がある。
が、夕方になると、商人たちや旅人たちは宿を求めて、その市から遠ざかる。大通りには人もまばらになり、この街本来の静かさを取り戻す。
「これを、いっぱいにしてください」
その通りにある酒屋で、おれは、手持ちの酒瓶を差し出した。
「それから、なにか肴になるものを」
山岳地帯をずっと歩いてきたおかげで、もう服もボロボロ。乞食坊主みたいな格好になっている。
「旅人さんかい？　よかったら、宿を紹介するよ？」
「いや、いいんです。見ての通り、金もない」
この日は、通りに腰を下ろして、出されてきたギョーザをつまみに酒を飲み、それで寝転がってしまおうと思った。
気候もいいし、その辺に転がって寝ていても、翌朝冷たくなって死んでいる、なんてこともない。山岳地帯で道に迷い、虎とかが徘徊する中を眠っていたことを思えば、快適に眠れる環境ではあるのだ。
龍京は、美しい。
建物の二階から、二胡の音色が落ちてくるところがある。
大きな建物で、所有者は龍京の貴族らしい。貴族は、客をもてなす際、歌妓に演奏をさせる。その演奏の出来栄えを話しながら、酒を飲む。それがこの土地に住む人の楽しみであった。
おれは、そこからこぼれ落ちてくる、二胡の音色を聞きながら、酒をちびちびとやり始めた。
「うまそうに、酒を飲んでるな」
おれにそう声をかけてきたのは、貴族風の身なりをした、おっさん。
身なりは貴族風だが、顔は異常にやせこけていて、日焼けをしていた。どちらかといえば、農夫とか、乞食坊主とかといった格好をさせれば、しっくりくるんじゃないか。
そのくせ、目元は涼しい。
目じりが尖り、猛禽類を思わせる。
「一番安い酒です」
「ほお？」

「ただ、ギョーザはうまい。それに、龍京に広がる朱色の建物が、夕陽に映し出されて、さらに輝きを増している。そして、二胡の、なんとも悲しい音色ではないですか。遥かなる年月とともに、この土地が養った、さまざまな人々の思い。ここでじっと、酒を飲んでいれば、自然とそれを感じることができる。それを感じるだけで、最高の酒の味になる。この世で、それ以上のモノが、いったいどれだけあるでしょう」
「おお……」
どうも、おれの言葉のどこかに、情緒を感じたらしい。
男は、一転、透きとおった目をした。
男は、なにを思ったのか、黙っておれの隣に腰を据える。
このおっさんとは、別に知り合いではない。たった今、顔を合わせたばかりだ。
それなのに、そこに座った男は、口元を緩ませ、妙な親しみをみせて、身の上の話などをしはじめるのだった。さまざまな苦労や、命を懸けるような賭けなど、壮絶な戦いの末、ここまでのぼりつめたのだという。
おれは適当に相槌を打っていただけで、別にそんなこと、興味もなかったし、聞きたくもなかったんだが……。
これが龍京の風土かって？　いやいや、この場合に関しては、このおっさんが、変わっているだけだろう。
「だが、これだけで終わるワシではない。まだまだ、上を目指す」
「先生は、そこまでして、何を望んでおられるんです？」
「乱だ」
と、途方もないことをその男が言い出したときには、さすがに俺も呆れた。
「乱が起きれば、古い支配層が倒れ、新しい指導者が誕生する。ワシはその指導者を拾い上げ、軍師として覇に導く。その過程で、己の頭の中に描いた理想の世界を、この現実の世界で表現してみたい。ワシは若い頃、学を積んだ。学を積んだものが有する欲は唯一つ、それだけだ」
「ははあ」
お金をいっぱい貰うのが目的で出世するんじゃなくて、出世そのものが目的だということか。
いや、なんかちょっと違うような気もするけれど。
とにかく、こういう変なのには、関わらないほうがよさそうだ……。
って、おれが話を切り上げようとしたが、このおっさんは、おれを放そうとしない。
むしろ、ここからが本題だ、といわんばかりに、おれの袖を掴み、その汚い顔を近づけてくる。
「おぬし、この世界の人間ではないだろう」
そうです、ともうかつには言えずに、おれは黙っている。
「隠さずとも、よい。確かに、この世界の人間は、我々と変わらぬ容姿をしている。だが、違いもあるのだ。ワシには、それがわかる。わかるようになった、とでも言えばいいか。ワシは、西行という」
西行？
「もしかして、古の歌人、西行法師ですか？」

「違う」
男は、にがい顔をする。
おれは、その意味を、なんとなく理解することができた。
この世界では、元いた世界での名前を名乗るということはしない。この場合、自分の名を、気まぐれでつければいいのだ。ようは、相手に呼んでもらう言葉が必要というだけ。ニックネームみたいなものだ。
「おぬし、名は？」
「では、マルゲレーテ、とでもお呼びください」
「女人の名のようだが」
「ただの、名です。それ以上、何の意味もありません」
「では、マルゲレーテ殿。これも何かの縁だ。ワシと一緒に、天下が逆さまにひっくりかえる瞬間を、見てみないか」
まるで、もう、ある程度準備が出来ているみたく、言う。
おれは酒を飲みながら、しばらく黙っていたが、どうもこの西行とかいう男、おれを本気で誘っているつもりらしい。
というか、本気で天下を取れると、考えているのか。
ばかいえ。
「残念ですけど、おれは天下なんか興味ないですし、悪事に加担するつもりもありませんよ」
「おぬしのモノサシでは、悪事かもしれないが……」
「それに、それは成功しそうにもない。エリアス王朝は、エリアス女王が大陸を統一して以来、磐石だ。そうそう、転覆するほころびなんて、見つからないはずです」
「ワシは軍師だ」
軍師とは、勝てないことは、絶対にやらない。逆に言うなら、勝てる算段があるから、それを断行する。軍師とは、そういうモノだ……そう言いたげだ。
「好きにしなよ」
おれは頭を掻く。
おれは、これ以上、この男と議論を重ねるつもりはなかった。議論をするせいで、せっかくのギョーザが、冷めてしまう。
ちょうど、二階から聞こえてきた、二胡の演奏が止んだ。
男は、それを合図に立ち上がる。
「この龍京の景色。いつまであるかわからんぞ。今のうちに、存分に眺めておくんだな」
そんなことを言って、あとは、おれのほうを一度も見ずに、中に入っていった。
なんだ、あいつ……。
まあでも、おれにはじきに、そんなヤツのことなんか、気にならなくなった。先に飲んだお酒が、くたびれた身体に十分にしみこんできたらしく、そのまま眠りの世界へと落ちていったからだ。

ぐらぐら、と身体を揺らされて、なんだか地球全部がまわっているような気分になる。
いや確かに、地球は北極南極を主軸にして、回っているらしいのだが……。
「……もし、旅の方……」
「うええ？」
重たいまぶたを、うっすらと開く。
横たわったおれの目の前にいたのは、亜麻色の髪の毛を、腰あたりまで長く伸ばした、美しい女性。
その首筋の細さや、きめの細かい、張り詰めた白い肌をみると、まだ十代ぐらいの女の子にみえる。が、彼女の澄んだ深い瞳、そして彼女の纏っている雰囲気の落ち着きっぷりはどうだ。長い間、剣の修行でもしていたのだろうか。とても十代のコが出せる雰囲気ではない。
そんなちぐはぐな、でもすんごく綺麗な女の人が、二胡を片手に抱き、膝を屈ませて、おれの顔を覗き込むようにしていたのだ。
「あらまー……」
おれは、すぐに起き上がって、キチンと座りなおす。
「参ったな。そんなに、急いでいるつもりじゃなかったんだけれど」
「は？」
「どうもおれは、特急列車に乗ってしまっていたらしい。それも、天国行きの片道列車にね」
「……」
「だからこうして、目の前に、天使様が現れているんだろう？　あ、女神様の間違いだったか」
その、目の前の美人の眉が、うっ、と歪む。
おれの、悪い冗談以前に、おれの口から吐き出される息が、耐えられないみたい。そりゃそうだ。アルコールとギョーザの含んだ、強烈なやつだから。
「すまねえな。恨むなら、この土地の、酒とギョーザを恨んでくれ。どちらも美味しくって、つい手を出しちまった」
「それはそうと」
彼女は、おれから距離をとりつつ、落ち着いた表情で、
「ここは、龍京の内務相であられる貴族様が、住んでおられるお屋敷です。寝る場所じゃありませんよ」
見たところ、この彼女、さっきまで二階で二胡を演奏していたひとみたい。
で、演奏が終わって屋敷から出てきたところ、寝転んでいるおれを発見した、と。
「いやいや、悪いねえ。アナタの演奏がつい美しくて、ここで聞き惚れていたんだ」
「宿でしたら、ご案内します」
褒めたのに、顔色を変えないばかりか、話題に乗ってこようともしない。
まー、そっけないのも当たり前だ。おれがこのヒトだったら、おれみたいな酔っ払い、絶対に相手にしない。
「あらら、案内してくれるの？　それは願ったりかなったり。でもねえ、でへへ、おれ、金がなくって……」
「なくても、そこはダメです。お役人に見つかったら捕まって、しばらくは塀の中で、臭いご飯

ですよ」
「そいつはマズい。おれ、美味しくないものが嫌いなんだ。美味しいものは大好き。えへへへへ」
おれは立ち上がろうとした。
でも、足もとがふらついている。
女の人は、そんなおれのニノウデを掴んで、無理やり立たせる。
ふわりといい匂いが、長い髪が揺れるたびに漂ってくる。それと同じように、この女の人は、おれから放たれる悪臭に耐えているはずだった。でも、いやな顔をしたのは最初の一瞬だけで、あとは夕凪の河原で涼んでるひとみたいに、穏やかな顔を保っている。
女の人に連れられて、ついた先は、ひとけのない路地裏。
彼女はそこでいきなり、おれを、どん、と突き放した。
おれはそのまま、地面にべたりと転がる。ああ、地面が冷たくて気持ちいい……。
「あなた」
「ふぁい？」
おれの前に立った彼女は、さっきとはうってかわって、鋭い目をしている。殺気とか、怒気みたいなのを、瞳に宿らせて。
「西行とは、どういうご関係ですか？」
「西行？」
きいたこともないやつだ。
「とぼけないでください。さっき、あの家の軒下で、一緒に話をしていたでしょう」
「あー、そーそー。そういう名前だった。いやあ、スッカリ忘れちゃって……」
「真面目に答えなさいっ」
「大きな声を出さないでくれ。頭に響くって」
今のおれになにをしても、暖簾に腕押し状態だぜ。
頭くるくるぱーだもん。
この女の人、なんだかんだと、話した内容について聞いてきたけれど、おれのほうも、お酒が混じったせいか、よく覚えていない。というか、自分でも何をしゃべったのかよくわからないのだから、聞いているほうも、なおさら、訳わからなかっただろう。
二、三度問答をして、女の人は、ついに、おれから何かを聞きだすのを諦めた。
「……どうやら、本当に初対面のようですね。あなたと西行、匂いが、よく似ていた気がしたものですから」
「くさくて、わるかったな！」
「そういう意味じゃ、ありません」
もう、女の人、呆れている。
はあ、とため息をついて、
「……お酒、飲めないのでしたら、今後控えたほうがいいと思います。さようなら」
とかなんとかいって、その後スタスタといってしまった。

あのヒト、いったい、なんだっていうんだ。

龍京には、かつてこの地方を治めていた王族が住んでいた城が残っている。
その当時の都市計画として、その城を中心に、官府を置き、商業地、農村……と、輪のように配置された。それがそのまま現在に至っている。
龍京の中心地は、執政を行う貴族たちのエリアで、民間人が立ち入ることはない。
「もし」
と、そこにいる門番に止められる。
「こちらは、行政府管轄の集会会場となっております。関係者の方以外は、お通しできません」
「ああ、いいんだ。招待されてきた。本日の集会に、参加させてもらう。紹介状もある」
おれは、門番に紹介状を見せた。もちろん、本物だ。
だけでなく、この日は、あの汚い格好を改めて、この土地の正装を身に纏っている。自分で言うのもなんだけど、どっからどうみても、まともな賓客にしか見えない。
「失礼しました。どうぞお通りください」
「ありがとう」
中は、すでに多くのひとたちがいた。
会場となっている部屋は広く、テーブルがいくつもあって、百席ぐらいが用意されている。だけでなく、このときも歌妓が用意されていた。まるで宴会場のような感じだ。牛、羊、豚などの豪華な料理がコースで振舞われ、陪席しているひとたちは、すでに酒を帯びている。
その会場の片隅で、演奏をしている女性。
その二胡弾きの女の人が、おれの顔をみるや、手にしていた弓を、はらりと落としてしまった。
「！？」
と、さぞわが目を疑ったことだろう。
入ってきたのは、昨日の、口が臭い酔っ払いではないか。その汚い酔っ払いが、なんでこんなところにいるのか……。
おれは、その女の人に向かって一礼したが、彼女は、次の瞬間にはもう、何事もなかったかのように、弓を拾いなおして、演奏をはじめている。
おれとは、目も合わせてくれない。
困ったなあ。嫌われちゃったのかなあ。なーんて思いつつも、おれは彼女のところに行く。
「……私は、演奏に集中したいのです。用があるなら、手短にお願いします」
口調は丁寧だけれど、かえって冷たく聞こえる。ってか、つーんとしている。
「そう、冷たいこと言うなよお。きみの名前を知りたくて、わざわざここまで来たんだ。きみみたいな美人の名前を聞きそびれるなんて、昨日のおれは、どうかしていた」
「そんなことのために……今のアナタも、どうかしてます」
彼女は、こめかみあたりに怒りを立ち上らせる。
でも、彼女も大人。ここで騒動を起こして、この会合を台無しにするわけにはいかないということは、心得ている。

噴き出てくる怒りを、喉の奥でじっと抑えながら、顔だけは、白い顔を作っている。
「……シャオ・ユイです」
「へえ、いい名前だ。聞いただけで、風が薫ってくるような気がする」
「もう、いいですか？ 用がないなら、あっち行ってもらえますか？」
「ああ、ついでにもうひとつ。昨日の屋敷の持ち主の内務相ってひと、ここにいるよな。どのひとだい？」
「それとアナタと、何か関係があるんですか？」
「いーから、教えてくれよおシャオちゃん」
はー、と一呼吸おく。
呆れて、怒る気にもなれなくなったみたい。
「あの、上座にあるテーブルの、中央」
「へえ、どれどれ」
「ちょっと、顔を近づけてこないでくださいっ。今度やったら、本当に怒りますよ」
「はいすいません」
「……中央の、恰幅のいい方です」
言われて、そのほうを見てみるが、そこには、悪いけど恰幅のいいヒトたちしかいない。
が、まわりの人たちの気の遣いようをみると、どの人物が内務相かは、なんとなくわかってくる。
「その内務相と今話をしている、あの若いのはなんだ」
その、内務相が座っているテーブルの対面には、十五、六ぐらいの、女の子がいる。白い髪に、変な髪飾りをつけている。龍京やアオイチ、エルパあたりではみたことがないから、たぶんエリアス地方の田舎村あたりにある、風俗なのかもしれない。その女の子の横には、さらに年下の、髪がもじゃもじゃした子供。そして、おれと同じ年恰好の、ドレッドの若い男。
「彼女は、イリス・イヴィエール。神秘的な力を持つ、デル族の生き残りだそうです。近くの少年は、ムーウェン。そして、その隣の若い男性が、カズノさんです。みなさん、アガシュラの手がかりを求めて、エリアスから、ここまで旅してきたそうです」
「へえ。遠いのに、大変だな」
アガシュラとデル族が、対立関係にあったことは知っている。そして、デル族がアガシュラによって根絶やしにされてしまったことも。
デル族が持つ不思議な力が、アガシュラにとって邪魔な存在だったとか。
その生き残りのお嬢さんが、アガシュラを探してるって？
「みなさん。今日はお集まりいただきまして、ありがとうございます」
内務相が立ち上がり、会場にいる人々に向かって、挨拶をはじめる。
「今日はこの、デル族の生き残りである、イリス様も同席しております。聞けば、各地で暗躍しているアガシュラに立ち向かうべく、ここまで旅を続けてきたという。若いのに、立派なものです」
そう、肩を抱くようにして紹介されたイリスは、立ち上がって、照れたように挨拶をする。そのはにかんだ笑顔は、まだまだあどけない少女のものだ。

「さて、今回、みなさまに集まってもらったのは、このアガシュラについてです。知ってのとおり、アガシュラは各地で暗躍し、世界を陥れようとしています。この龍京も例外ではありません。先日、アガシュラ側に潜入した消息筋から、近々、この龍京を狙った大規模な行動があるとの情報が入りました」
挨拶のために静まり返っていた会場が、にわかにざわつく。
内務相は、そのざわつきが収まるのを待って、
「世界を混乱に陥れようとする、やつらの思惑を阻止せねばなりません。そのためにも、皆様方の力を、貸していただきたい」
といい、それから後は、大まかなアガシュラ掃討作戦についての話になった。

数日後。
アガシュラ討伐のための龍京軍が編成され、アガシュラが陣を構えている、アルカディアに向かって歩を進めた。
部隊は何層にも分かれ、それぞれが長所に特化した武器を扱う。さらに指揮系統を細かく配置して、部隊の情報を逐一報告させた。
編成に隙がなく、行動にムラがない。
どんな軍隊が相手でも、押しつぶしてしまえるぐらいの、強力な軍隊であった。
軍が出て行った後、おれは、ひとがいなくなった市場通りで、寂しく風に吹かれているシャオを見つけた。
彼女は、やっぱり涼しい顔をして、二胡を片手に演奏をしている。
でも、おれを発見すると、またか、みたいな、うんざりした顔を一瞬した。
「シャオは、いかないの？　アルカディアに」
「私は、ただの二胡弾きです。戦争にはいきません」
「またまたあ。剣をやっているのだろう？」
「……なぜ、知っているんですか？」
「いやあ、あはは。その、しなやかな腰つきをみれば、わかるって」
シャオの顔が、サーッと蒼白になる。同時に、すごい顔で、おれを睨みつける。
剣をやってるひとは、その風格が腰つきに現れるものだけれど、でもそんな一般論もダメみたい。どーも、おれイコール悪いヤツ、っていう公式が頭の中で出来上がっているらしく、腰つきを見れば、って言葉をおれが使っただけで、変態みたいに思われてしまうみたい。
そんなつもりじゃあ、ないんだけどなあ。
でへへ。
「私がいようといまいと、龍京軍の勝ちは目に見えています」
ふーっ、と気を取り直して、シャオは言う。
「西行が、何をたくらんでいるのか知りませんが、自ら死地に赴いているだけです。西行率いるアガシュラがどんな手を使おうと、龍京軍の大群相手に、かなうはずがありません」

「西行さんとやらは、アガシュラだったのか」
「……内務相は、西行をこちらの間者だと思っているようですが。でも、西行は、瞳に濁りがあります。その濁りが、彼の行動や言葉を濁してしまっているのです。あの者の言葉は、信用できません」
「するどいね」
「私は、言葉に誠実さを込めないひとが、本質的に嫌いなのです」
「だと思った」
「それはアナタも、同じですよ」
「だろうね」
あーらら。完全に嫌われちゃったよ。
でも、この後に及んで、ひとの好き嫌いを、言ってる場合じゃないんだよシャオさん。
**事態が、逼迫してきた。**
おれのほうも、もうちょい真剣にやらないと。
「シャオ。きみの言うとおりだよ。今回、龍京軍が勝つ。龍京軍が勝って、エリアス王国は滅びる」
おれがそう言うと、シャオは、えっ、とおれのほうを見る。
「龍京軍は、勝つべくして勝つ。それと同じで、エリアス王国も、負けるべくして負けるんだ」
「龍京軍の相手は、エリアス王国ではありません。アガシュラです。エリアス王国とは、無関係です」
と呟いたシャオも、実は心の片隅に、一抹の不安を抱えていたらしい。
西行のたくらみが、わからない。
アガシュラである西行は、なぜ、自分から、首を絞めるようなことをしたのか……。
おれは、そんなシャオの胸中が、手に取るようにわかった。
「なあに、おれときみがアルカディアに行って、龍京軍を西行軍から引き離すことができれば、そうはならない」
「なぜです」
「それは、まあ、……イロイロあるんだよ。複雑な事情がね。それで、頼みがある。龍京軍の司令部までいくのに、同行してほしい。道中、不安なんだ。おれ、全然強くないからな。虎とかに襲われたら、なす術もなく食べられちゃう。でも、きみのその腕なら、安心できるだろう」
「……いいでしょう。同行します。ただし」
「ただし……？」
「この件が終わったら、金輪際、私の前に現れないでください。もし、私に付きまとうようなら、アナタを遠慮なく叩き斬ります。私に斬られて、足腰が立たなくならないよう、気をつけてください」
ひやあ。
涼しい顔をして、恐ろしいこと言うねこのヒトは。
**そこが、かわいいんだけど。**

今回、龍京軍を指揮するのは、龍京警備隊に籍を置く士官、ユエ。
まだ若い。
が、頭脳明晰で、警備隊においてたびたび功をあげた。今回の作戦行動において、総司令官に抜擢されたのも、その実力において申し分なしと判断されたためだ。
感情の起伏があまりない、というか、滅多なことでは表にださない性格らしい。
例えば、おれがシャオと一緒に、司令部に転がり込んできて、作戦を中止して、龍京に引き返せ、なんて言っても、彼は、
「ほう」
と、眉を少し動かしただけで、何の表情の変化もない。
司令部には、集会で見かけたような官僚が、数人いる。エリアスから来た旅人イリス、そしてカズノもいる。
「マルゲレーテ殿、といいましたね」
「はい。いいました」
「失礼だが、アナタは、どのような立場で、そんな口をおききになるのですか？」
ユエがそう言うのも、もっともなことだ。
どこの馬の骨かもわからないやつに、作戦を中止して引き返せ、と言われても、はいそうですか、というわけにはいかない。
場合によっては、作戦を邪魔する輩として、切り捨ててしまおうか、とも、ユエの頭の中に浮かんでいたはずだ。
一方のおれは、ユエの目をじっと見据える。
「私は、エルパ長老会からの代表として、ここに来ました。龍京軍の総司令官に、どうしてもお伝えしておかなければならない事項がありまして」
「エルパ長老会……？」
長老会は、港町エルパの、実質的な政府機関のことで、龍京の領主、黒月城城主と、同じ立場にある。
「アナタの言う、作戦中止とは、エルパ長老会の総意なのですか」
「そうとってもらって、結構です」
「……詳しく聞きましょう」
ユエは、座りなおして、聞く姿勢をとる。
同時に、その席にいたひと全員が、姿勢を正し、座りなおした。
話し合いが、始まった。

「作戦を中止する、その根拠はなんです」
ユエは、その瞳の奥に、明晰な頭脳を持っている。
今回の作戦については、エルパの代表であるらしいおれが、なんと言おうと、筋道が正しければ、自分の意見を押し通す。そういう気概でいるようだ。
「龍京軍は、戦術において強く、戦略において弱い。戦略において弱ければ、どれだけ強い軍隊

であろうと、必ず負ける。そういうことです」
おれのこの一言が、悪口みたいに思ったらしく、その場にいた武官がいきり立とうとした。
その武官を、ユエは黙って制止する。
が、ユエも、おれに対する視線を厳しくした。軍隊が弱いということは、総司令官である自分に向かって、悪口をいっていることに他ならない。
「エルパ長老会は、どういうつもりで、そう言っているのですか」
口調は穏やかだが、それは質問ではなく、恫喝のように聞こえる。
場の空気が、重く緊張した。
かまわずに、おれは続ける。
「ここアルカディアは、野原と違い、地形の複雑さにより陣形がとりにくく、また足場が少ないため、兵を多く配置できません。そこに兵を入れるのは、下策というものです。この地形は、守る側にとっては戦いやすく、攻めるほうにとっては戦いにくい」
「それは、この作戦においては通用しない理屈です。諜報部隊の情報によれば、敵は寡兵ときく」
「その寡兵に、谷を挟んで防壁を作られ、責めあぐねている状態のようですが？」
「その防壁も、谷を埋める工事によって解決するでしょう。敵は篭城の構えをみせていますが、時間の問題です」
「その寡兵によって、この龍京の大部隊を、このアルカディアに足止めしておくことこそが、アガシュラ側の本当の目的だとしたら、どうでしょう？」
ぴく、とユエは、眉を動かす。
おれは、続ける。
「この作戦の大綱は、内務相の口から出ている。そうですね？」
「そうです」
「その内務相の裏で、糸を引いているのが、アガシュラの軍師で、西行という男です」
「……」
「確かに龍京軍は、アルカディアにいるアガシュラを殲滅できるでしょう。完膚なきまでに、叩き潰せます。しかし、この作戦の案は、元はといえば、敵であるアガシュラの、軍師の頭から出たものなのです。その案に従って、軍をアルカディアに展開させている時点で、龍京軍の負けです」
「どう、負けなのです」
「西行の狙いはただ一つ。エリアス王朝の転覆です。それにはどうすればいいか。まず、都市の中で人口が一番多い龍京……すなわち、兵の数が多い龍京の軍隊を、どこか別の場所に隔離してしまうことで、対峙する兵の数を少なくすることです。もうひとつ、エリアスの王室警備隊の目を、アオイチに向けさせます。かの地は隼の城に、エリアス王家の支配を快く思っていない輩が集まっています。このタイミングで、黒月城が襲撃されることになれば、エリアスから、多数の援軍が出されることとなるでしょう。その混乱に乗じて、私が西行なら、次の一手を打ちます」

「エリアスか！」
「そう。エリアス国王であるラジャータ閣下以下、一族の抹殺。実行できるとするなら、龍京とアオイチに気をとられている、このタイミングしかないでしょう。そして、それが成功すれば、王都エリアスに、政治的空白が生じます。天下がひっくりかえる瞬間です」
ユエが、目に見えて動揺しはじめる。その場に列席している武官も例外ではない。
「し、しかし。証拠がない」
ユエも、全軍を預かる総司令官。
いくら、もっともらしいことを言われても、目の前にぽっと現れたおれの言葉だけを鵜呑みにして、断を下すような、軽率なマネはできない。
「左様。私はアナタに、証拠として、その事実をこの場で証明することはできない」
「……」
「しかし、ここで軍を引き、アガシュラの出方を見るのが、懸命な判断でしょう。谷を挟んで防御されている今の状態では、どのみち攻略に時間がかかる。一旦軍を引き、戦いやすい野原まで敵をおびき出してから、対峙するのが上策です。その位置まで後退すれば、エリアスやアオイチに変事があったとしても、すばやく部隊をまわすことができ、またアガシュラに対する牽制にもなるでしょう。龍京軍は、何も傷つくことなく、二つのことを同時になしえるのです」
「よく、わかりました」
ユエは、頷く。
「……退却しましょう」
それがもっとも良い判断だと思ったらしい。思ったら、すぐに実行に移すことがでる、優秀な司令官だ。
退却指令を、まわりに伝え始めたちょうどその時、
「ムーウェン殿が、谷を飛び越えて、ひとりでアガシュラに向かっていきました！」
伝令のひとりが、そう伝えに来たのだった。

ムーウェン。
イリスとともに旅をしてきた少年だ。
彼にはジョエという精霊がついていて、この精霊の力により、渓谷を飛び越え、アガシュラの陣地に単機突っ込んでいったのだという。
えい、くそっ。
みんなで仲良く山を降りるっていう段取りがついたところなのに、余計なことをして。
横で聞いていた少女イリスは、青い顔をしている。
でも、どこか使命感というか、責任感というか、そういうものが人並み以上に強い少女みたい。
恐怖で震えだしそうな身体を、自分の両手で押さえるようにして、
「私は、ムーウェンを助けに行きます」
と、大人たちに言い放ったのだ。
「それはできない。谷を越える部隊を、きみのために裂くことはできない」
ユエは、難しい顔をする。

敵は寡兵といえ、谷の向こう側に隠れている。
ムーウェンひとりのために、捜索隊を出すということは、捜索隊の被害にも繋がる。そのようなことは、総司令官としては、容認できない。
「いえ、私ひとりが行きます」
「バカいえ！」
そういったのは、ドレッドのカズノ君。
「アガシュラが狙っているのは、デル族の生き残りの、イリス、おまえだ。そんな危険な場所に、行かせるわけにはいかないっ」
「ムーウェンは、私の、大切な仲間なんです！　ここで、見捨てるようなことは、できません！」
「だったら、おれが行く。イリスは、みんなと一緒に、龍京へ帰ってくれ」
「カズノ……でもっ！　ひとりで行くなんて、ダメだよっ！　行くなら、私も！」
「どっちもダメだあっ！」
おれは、その場で、そう叫ぶ。
叫んで、議論を打ち切らせる。
「イリス、君はカズノ君と一緒に、今すぐエリアスに向かってくれ。そして、ラジャータ王に謁見するんだ。そして、今日のことを、陛下に全部報告するんだ。デル族の末裔である、きみの口から出る言葉なら、陛下も耳を傾けてくれるだろう」
おれの言葉を聞くイリスの目が、悲しみや怒りの色に染まっている。どうして、大切な仲間を救いに行ってはいけないのか……。その理不尽さで、今にも涙が噴出しそうになっている。
でも、泣きそうでもなんでも、おれはこの少女に、伝えなくてはいけない。
前を向いて進もうとしている少女に、一見邪にみえる、正しい道を。
「大丈夫。きみが今、アガシュラを追いかけなくても、ムーウェン君は助かる。でも、きみが今エリアスに向かわなければ、全部手遅れになるかもしれない。国が滅んでしまえば、もっと多くのひとが、悲しい思いをする」
「でも、それだとムーウェンが……」
「ムーウェン君は、おれに任せてくれ。絶対に、おれが助けてやる」
「……」
「約束する。おれは一度も約束を破ったことがない、すごくマジメなヤツなんだ。だから信用していい」
おれは、イリスに対して、精一杯、誠実な目をしてみせる。
その誠実さが、どこまで伝わったのかはわからなかったけれど、彼女は最後には、うなだれるようにして、頭をさげ、
「お願いします……」
と、呟くのだった。

「どうするんですか、ああいうこと言っちゃって」

ユエ率いる龍京軍が引き上げた後、座り込んでいるおれに対して、シャオが腕を組みながら言う。
「……」
「どこが、マジメなヤツなんですか。聞いてて、本当に呆れてしまいました」
「先生。お願いします」
「えっ」
「アナタだけが、頼りなんです」
おれは、さっきのイリスみたいに、シャオに対して、頭をさげた。
はー、と、彼女は長いため息をつく。怒っていいやら、呆れていいやら、自分でもよくわからなくなってきているみたい。
「アナタ、いったい何者なんですか。路上でいきなり寝てて、私に下品に絡んでくるかと思えば、政府筋しか入れないはずの集会に現れたり、こんな無茶なこと言ったり。エルパ長老会の代表って話、あれ、本当なんですか？」
「さあ」
「アナタねえっ！」
「なに、おれの正体は、ただの酔っ払いだよ」
きみの美しさに酔いしれたね、と続けようとしたけれど、また怒られそうだったから、やっぱりやめた。
おれが頭を下げ続けている間、はーっ、とか、あーっ、とか、ため息なのか、なんなのか、よくわからない声を出して、怒っている。本当は感情を表に出さない、クールで通っているシャオ・ユイなんだろうけど。そのシャオが、どうして、こんなに暴れているんだろう。
「ほらっ。行きますよ。マルゲレーテさん」
「お？」
「ムーウェンを、救うんでしょう？」
「そうです」
「ここからは、私に任せてください。龍京を、エリアスを救ってくれたお礼に、剣の舞を披露して差し上げます」

谷の向こう側にいるアガシュラは、寡兵だという報告を聞いている。
ただし、寡兵、というのは、龍京軍の大群と比べて、という意味だ。
谷の向こうには、百とも、二百ともしれない数の兵士が、森の影に隠れながら、こちらの様子をうかがっている。
考えてみれば、もともと龍京軍が戦うはずであったアガシュラ軍を、シャオがたった一人で受け持つということになったのだ。
こいつは、無理かな……。
と、おれは頭の中で、思っていた。
敵陣の中で斬りあい、数分後には、おれとシャオが、ズタズタになって、そのへんに転がってい

ることを覚悟した。
ところが、剣を抜いたシャオの強さは、どうだろう。
群がる敵を前に、一歩もひかない。どころか、自ら敵の中を、そのしなやかな足で駆け、草でも刈るように、軽々と太刀を振るう。ひしめき合うようにしていた敵が、刈り取られた草のように、バタバタと倒れ、シャオの前からいなくなっていく。
おいおいおいおい。
なんつー強さだ。
敵が群がるその向こう側に、いつかの集会で見た、モジャモジャ頭の少年がいて、その少年に付き添うようにして、精霊が必死に敵を捌いている。
「ム――――――ウェン！　なんとかしなさいよっ！」
「そんなぁ！　谷を乗り越えちゃえば、アガシュラなんて、すぐに倒せるっていったの、ジョエじゃないかー！」
「うるさいっ！　言い訳してないで、働けえっ！」
とか叫びながらも、敵の猛攻に耐えている。
意外に、つえーじゃねえか。
そこにシャオも加わったこともあり、敵の攻撃が、にわかに緩んだ。
何層もある敵の、そのまた向こう側に、汚い顔した坊主がいる。
「年貢の納め時だぜ。西行さん」
おれは、西行に聞こえるよう、大声で言った。
シャオやジョエ、ムーウェンが倒した敵は、まるで魂魄のようになって消えうせる。どうやら、アガシュラ軍のほとんどは、西行が使う、妖術の類らしい。
「アンタ、不思議な妖術をつかうみたいだな。西行の名前は、伊達じゃねえってことか」
「おぬしこそ、ふざけた名前を使う。ピザの名前かと思った」
「アンタ最初、女人の名前かと思ったって、言ってたじゃん！　はじめから、そう思ってたのかよ！」
「やかましい！　おぬしの仕業じゃな。龍京軍が、アルカディアから撤退したのは」
「どうかな」
「くそっ。はじめて会ったときから、いやな予感はしていたのだ。こんなことなら、本気で、味方にしておくか、殺しておくべきだった」
西行が逃げ出す。
同時に、その場にいた敵が、いっせいに襲い掛かってきた。
シャオが、おれやジョエ、ムーウェンを守るように、その敵たちの前に進み出る。
「おいっ！　いくらシャオが剣の達人でも、無理だ。逃げろっ。ムーウェンと合流できたし、もう西行に用はない」
「いいえ、ここで、龍京に仇なす敵を、始末しておきます」
「きみは敵を、甘く見すぎだ」
「……アナタのほうが、私のことを、甘く見たようですね」

結局。逃げた西行を追うことは、できなかった。
あたり一面の敵をさんざんに蹴散らしたあと、疲れて、眠ってしまったジョエとムーウェン。
同じように、シャオもおれも、必死になって敵を倒した。だから今はこうして、へとへとになって、お互い地面に座り込んでしまっている。
「おれは、西行を追う」
もう、夕暮れに差し掛かっていた。
アルカディアからみる夕陽は、龍京のそれとおなじく、美しい。
「勝手にしてください。もう疲れました。あなたの顔なんか、もうみたくもないです」
その夕陽が、相変わらず冷たいことを言うシャオの頬を、赤く染める。
「でも、どーしても、どーしてもギョーザを食べたくなったときには、龍京に来てください。ギョーザをご馳走して差し上げます。好きなんでしょう、ギョーザ」
「うん」
「でも今度は、道端じゃなくて、ちゃんと逗留してくださいね。できれば、数日」
「あらら、そんなこといって。もしかして、おれのこと、好きになっちゃった？」
「ばか」
なんて悪口をいったシャオの言葉からは、いつもみたいなトゲトゲは、感じられない。
「ギョーザを作るのに、時間がかかるだけですよ」
そう、優しく言うのだった。